陳舜臣さんを語る会通信

NO.132　Jan.　2025

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2025年1月1日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

阪神・淡路大震災　そして 30年

阪神・淡路大震災
1995.1.17 午前5時46分
（報道写真より）

「悲しみを超えて　神戸よ」

1　神戸新聞　（明治31年2月12日第3種郵便物認可）

神戸よ

陳舜臣

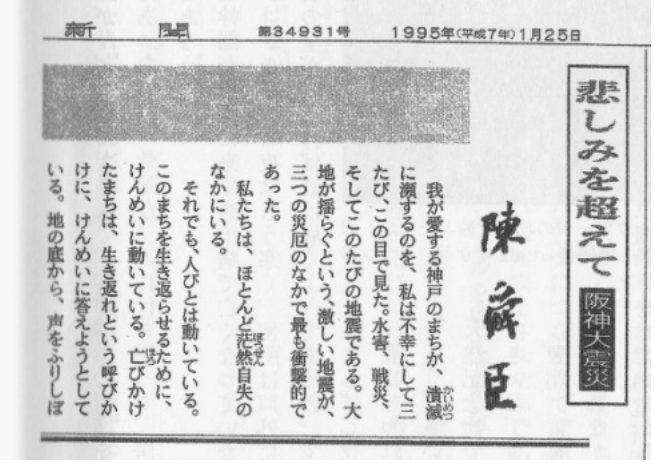
でも戦災でも、私たちはその声をきいた。五十年以上も前の声だ。いまきこえるのは、いまの轟音である。耳を掩うばかりの声だ。

それに耳を傾けよう。そしてその声に和して、再建の誓いを胸から胸に伝えよう。

地震の五日前に、私は五ケ月の入院生活を終えたばかりであった。だから、地底からの声が、はっきりきこえたのであろう。

神戸市民の皆様、神戸は亡びない。新しい神戸は、一部の人が夢みた神戸ではないかもしれない。しかし、もっとかがやかしいまちであるはずだ。人間らしい、あたたかみのあるまち。自然が澄れ、ゆっくり流れおりる美わしの神戸よ。そんな神戸を、私たちは胸に抱きしめる。

って、答えようとしている。水害



新聞　第34931号　1995年（平成7年）1月25日

悲しみを超えて

阪神大震災

陳舜臣

我が愛する神戸のまちが、潰滅に瀕するのを、私は不幸にして三たび、この目で見た。水害、戦災、そしてこのたびの地震である。大地が揺らぐという、激しい地震が、三つの災厄のなかで最も衝撃的であった。

私たちは、ほとんど茫然自失のなかにいる。

それでも、人びとは動いている。このまちを生き返らせるために、けんめいに動いている。亡びかけたまちは、生き返れという呼びかけに、けんめいに答えようとしている。地の底から、声をふりしぼ

「一月十七日のこと」『神戸ものがたり』より抜粋引用

一九九五年一月十七日午前五時四十六分。この時刻を私たち神戸に住む人は、忘れることができない。

地底からゴーッという音がきこえたようである。ぐるぐるとひきずりまわされる。これはいったいなんだ。大地がうごいているのだから、地震にちがいないが、こんなに揺れるものとは思わなかった。私は脳内出血で五カ月入院して、退院して四日目の朝であった。目がさめると同時に、あるいは自分のからだの変調ではないかと思った。だが、妻が私のからだのうえにかぶさってきた。病後の私をかばう動作だとすぐにわかった。かばうと同時に、「死なばもろとも」ということがかんじられた。僅かのあいだだが、そうかんじたことで覚悟ができたようである。とはいえまだそんな未曾有の地震とは思わなかった。

「おや、燃えだしたぞ」

私の家は高台にあって、市街地に火が出るとみえるのである。

「ああ、あそこも、そちらのほうも火がでているぞ」

一か所だけではなかった。

■当時、陳さん宅は六甲山麓の伯母野山にあった。〝六甲山房〟

※「悲しみを超えて　神戸よ」は、一九九五年一月二十五日付　神戸新聞朝刊掲載

とみさわかよのさんの剪画（せんが）集『神戸・あの日より－1995年故郷－』

昨年暮れ（2024年12月15日）の神戸新聞朝刊に「慰霊と復興の碑 21人銘板追加」という記事が載りました。この記事に剪画作家のとみさわかよのさんのことが大きく取り上げられていました。とみさわさんのお祖父さんは東灘区の自宅で被災、約一年後、持病が悪化し避難先の病院で亡くなられました。この度、加わった銘板のなかに、お祖父さんの名もあります。記事には、**「とみさわさんは震災当時関東におり、２週間後に神戸へ戻って写真撮影を始めた。路上で営業していた理髪店、「みんなで頑張ろう」の横断幕が掲げられた元町商店街―。「愛する街と痛みを共有できなかった」との思いから、無我夢中で被災直後の光景を切り絵に落とし込んだ」**とあります。ここに、新聞記事中に記述のある２枚を含め３枚の剪画と文章を転載させていただきました。

是非一度、20枚の剪画と文章からなる『神戸・あの日より－1995年故郷－』（1997年 とみさわ工房 発行）を手に取ってみてください。なお、当記事は、とみさわ様のご承諾をえて編集させていただいております。

あの日より

一九九五年一月一七日午前五時四六分。正に悪夢としか思えない出来事でした。私の実家は東灘区にありますが、私自身は当時群馬県に住んでおり、あの日の神戸を体験した身ではありません。愛する街と、痛みを共有し得なかったという思いは、生涯私につきまとうことでしょう。自責の念が、私をこんなにも動かすのかもしれません。「瓦礫の街など描きたくない、これがあの美しい神戸とは思えない」という画家もいます。でも、私にとって神戸はどうなろうと神戸です。この年、私は何度も神戸へ帰り、自分にとって馴染み深い場所を訪れては写真を撮り、描かせてもらいました。……。

とみさわかよの

床屋さん

御近所の床屋さん。私の父も、叔父も、従弟も、そして震災後亡くなった祖父も、ずっとこの店の世話になっていた。あの日からずっと、風呂に入ることも出来ぬまま過ごしていた頃だが、髪を梳いてもらい、ひげをあたってもらった人はどんなに嬉しかったことだろう。

珈琲店

再建の 意志ある者は 集まれと
貼り紙にあり 老舗の珈琲店（カフェ）は

商店街

土埃（ほこり）舞い サイレン響き それでもなお
人優しくて 街は明るし

わが家（明石市東部）の被災状況

《1.わが家の被災概況》

当時、わが家は夫婦と娘二人の四人家族でした。
次女は広島で学生生活をしていたので、明石東部の家に居たのは三人で、全員無事だった。
三人は二階で寝ていた。部屋にタンス等、家具はなにもなかったので家具が倒れて…、というようなことはなかった。一階の台所の食器棚は倒れてはいなかったが皿、碗など食器が飛びだし、割れて床に散乱していた。

わが家はセキスイハイムの、コンテナを並べ積んだような家屋だったので、屋根、柱、壁など建物自体に被害はほとんどなかった。ただ、地盤が不等沈下したため、ジャッキアップの応急処置が必要だった。数年後、結局、建て替えた。

電気・水道は使えたがガスは出なかった。テレビは見れたので災害のおおよそはわかった。この状況は、ご近所まちまちで、水道は出ない家が多く、わが家は生活用水や風呂を提供した。ガスは、明石市がボンベ付でカセットコンロを貸し出してくれたので助かった。後、返せとは言われなかった。

《2.私と娘の通勤、通学》

私は当日、車で、職場である明石城西高校に出勤した。当時、車で通勤していたのか、山陽電車が動いているかどうか分からなかったので車にしたのか、記憶は定かでない。途中、信号が点灯しておらず困った。それに、余震が続いていて、不安だったが、二十分ほどで学校に着いた。そして、出勤してきた教師だけで職員会議が開かれた。

困ったのは長女である。長女の職場は大阪だったが、JR、阪神、阪急すべて動かず、それでも、真面目な長女はバスと神戸電鉄と福知山線を利用し、大大回りして、休まず出勤した。母親は「こんな時だから無理して行かなくても」と言っていたが、長女は毎日、暗い内に出かけて行った。

次女は広島だったので、特に影響はなかった。それでも、見舞金が出て、最後の一年、奨学金も貰えた。奨学金は、後、返還した。

《3.明石市の被災状況》

通常、"阪神・淡路大震災"と称しているが、明石では"兵庫県南部地震"という。死者11人、負傷者1884人、建物全壊2941棟、半壊6673棟。阪神間と比べ被害は少なかった。ただ、これら被害は、わが家のある明石東部に集中していた。（この箇所、「広報あかし」No.1421による）
附近には、屋根瓦が落ちて、屋根にブルーシートを掛ける家が多くあった。俯瞰すると綺麗で、そんな光景は到るところで見られ、"青屋根"と呼ばれた。

『阪神大震災全記録』
（毎日新聞社）より転載加筆

上掲写真2枚は「広報あかし」No.1421より転載

雨に備えて屋根にブルーシートが掛けられた
"青屋根"
報道写真より

「慰霊と復興のモニュメント」に陳舜臣さんの銘板が加わる

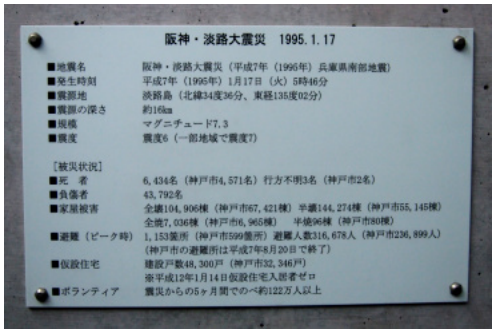
東遊園地看板

慰霊と復興のモニュメント
説明台

1.17 希望の灯り

この下が地下室

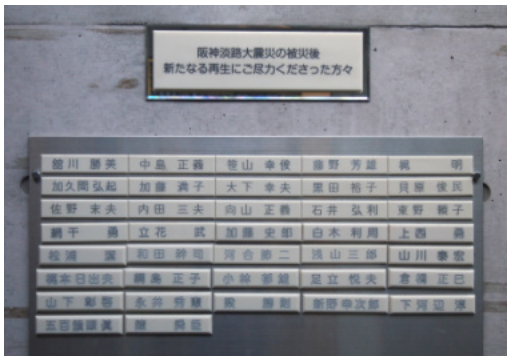
地下への階段の途中



地下室に入ったところのパネル

地下室　被災し亡くなられた方の銘板

阪神淡路大震災から30年の節目を前に、12月14日、神戸市中央区の東遊園地にある「慰霊と復興のモニュメント」に21人の銘板を加える式典があった。21人のうち11人は直接の犠牲者や被災後の病死者など。亡くなる経緯に震災が影響した人も含まれている。残りの10人は「再生に尽力された方」。モニュメントに刻まれた名前は計5068人。



再生に尽力された方の銘板

今回、「再生に尽力された方」として陳舜臣さんの銘板が加えられました。

（このページの写真はすべて 編集委員撮影）